

## ジェンダー・エッセイ

# 「キャリアはスプリントじゃなくて、マラソンだ！」

—ワーク・ライフ・バランスの問題

南オーストラリア大学日本研究科准教授  
大阪大学人間科学研究科外国人招聘研究員  
(財)大阪府男女共同参画推進財団インターナショナル・アドバイザー ローラ・デール

「キャリアはスプリント(短距離走)じゃなくて、マラソン(長距離走)だ！」と、ある見識の高い大学教授が研究者としての仕事を説明してくれたことがある。マラソンのように一生働き続けることを考えるならば、燃え尽きを避け、大局觀を持って働くことが必要だ、という意味を持つこの教授の言葉は、研究者としてのキャリア形成に限らず、現代社会に生きている女性が「働く」という大きな課題を考える時の指針となる。

失業者や非正規社員・派遣の仕事にしか就けない女性が増えつつ、女性の貧困が重大な問題になってきている。一方、正規職に就いている女性の中には、バリバリ働いてきたロール・モデルの女性先輩がいながら、子育てと仕事の両立が難しいため仕事を辞めざるを得ないことからくるプレッシャーに苦しむ人もいる。



子どもと過ごす時間を作る

長時間労働、低賃金、セクハラなど労働条件・環境が整備されていない状況下で、働く女性が職場から逃げたいと思う気持ちは、容易に理解できる。働く女性も、仕事からくる疲れやストレスをプライベートの時間にまで持ち込んでしまう、典型的な男性サラリーマン生活を送っており、専業主夫でもない限り家族や子どもを持つ余裕など無い。男性の働き方を労働者の基準とする職場であるかぎり、ワーク・ライフ・バランスを取ることは難しく、女性は仕事と家庭のどちらかを優先せざるを得ない結果となってしまう。

このことは、家庭を持つ女性だけに言えることではない。独身者(シングル・離婚)も同様である。一生働くことを前提にすれば、今の働き方や仕事の選択を再考する必要がある。たとえ条件の良い、やりがいを感じる理想的な仕事でも、プライベートの生活と両立できなければ持続可能な働き方にはならない。そのため、残業をどれだけするか、家族や友だちとの時間をどれだけ作るか、休みをどれだけ取るかなど、仕事もプライベートな生活も充実したものにするためには積極的にワーク・ライフ・バランスを保つ必要がある。

作家ジュリエット・B. ショー(Juliet B. Schor)博士の『働きすぎのアメリカ人(The Overspent American)』(1992)によると、消費のための労働は過消費の悪循環を生む。長時間働いた上に残業が必要となると生

活に余裕がなくなり、便利さをお金で買うことになってしまう。今ではマッサージ、冷凍食品、贅沢な旅行などが働く女性の生活の必需品となっているように、それらの必需品を消費するためにさらに働く必要性を生み出す。つまり、仕事を続けるためにお金をかけることが、ついに稼がなければいけない状況を生み出す結果となっている。この悪循環から抜け出すためには、ある程度の収入が得られているのであれば労働時間を減らすことである。そうすれば、その分消費しなくて済む。

この課題を検討している際に、社会学者L.コーチーの1974年の造語である「貪欲な組織(greedy institutions)」という用語に出会った。雇用側からすれば社員は資源であり、どんどん利用すべきモノである。資源の健康状態や労働能力が落ちることは問題だが、だからといって会社側から「この人はこれまで十分頑張ってくれたから、これ以上は頼めない。このへんで少し休ませてやろうか」とはまず言わない。だから労働者側は燃え尽きないために、自分で「今日はここまで、これからあとは明日またやろう」と自己管理をしていかなければならない。つまり、労働力を最大限(いやそれ以上に)使おうとする「貪欲な組織」の圧力に対抗し、「健康で成果を上げる働き方を持続させるために休むのだ」と主張できる自己管理能力が必要となる。

もちろん、これは働く女性に限った問題ではない。働く男性にもかかわる問題もある。そして、働くことはさまざまな人生の選択と社会状況とも関係する。経済力がないから結婚できない若い男性もいれば、低賃金で家賃が払えないため、親と同居しなければいけない「パラサイト・シングル」「寄生独身」というレッテルを貼られる若者)もいる。少子高齢社会の進展と世界的な経済不況による国内経済の後退を背景に、日本社会は種々多様な働き方、生き方を認めざるを得ない時期に来ていると思われる。マラソンのように長く働き続けることを可能にするには、ワーク・ライフ・バランスが重要である。健康やプライベートな生活、友だちや恋人との人間関係を大事にしながら仕事を続けるためには、家事の分担はもちろんのこと、収入と心の余裕のバランスも見直す必要がある。



ひとりの時間を作る

# Cutting-Edge

「カティング・エッジ」

## Move この人に聞く

### 格差・貧困問題とジェンダー —現実を見据えるために必要なこと

現在の日本社会では、格差、非正規化、失業、貧困といった負の側面が浮かび上がっている。1990年代初頭のバブル経済崩壊後、不況期が長びき、ようやくよい方向に転じるかと期待した矢先に、サブプライムローン問題に端を発する世界金融恐慌の危機、そしてリーマンショックが続き、日本と世界は暗い時代に突入している。こうした時代に、ジェンダー視点は、社会的平等を実現させる思想として、また社会分析のツールとして、どのようにその強みを發揮していくのかが問われている。

90年代末から矢継ぎ早になされた労働市場の規制緩和は、派遣、請負等々の多様な形態の非正規労働者を生み出してきた。2008年の年末から2009年の正月にかけての「ふるさと派遣村」に、「派遣切り」にあった後に家族の元に帰り得ない人々が多数詰め掛けたことは記憶に新しい。だがジャーナリズムの報道が彼らの困難を語るとき、製造業派遣の45%を女性が占めるにもかかわらず、なぜか女性の「派遣切り」に光が当たることはない。ワーキングニアが語られるときも、若年層の男性の不安定就労こそが、彼らの家族形成上の困難を招き、ひいては少子化問題に結び付く、という語りに問題が回収されてしまがちである。若年女性の不安定就労は、やがて「嫁に行くことで解決する」という暗黙の前提から、真剣には位置づけられない傾向が依然として根強くある。

貧困・格差問題を語るとき、ジェンダー視点は落とされがちである。またジェンダーを語るとき、貧しく困難を抱えた階級・階層の女性問題に十分に目が行き届かないという状況があるのではないか。『豊かな国の貧しい女性たち』(Poor Women in Rich Countries, Oxford UP, 2009)において日本について執筆するさいに、あらためて強調しなければならなかったのは、高齢単身女性とシングルマザーの貧困状態の厳しさである。そして現時点で非正規にとどまる若年女性は、未婚化が進むなか、高齢単身女性へとスリップし、将来の貧困層を拡大させる危険性が大であるということである。

「政権交替」が何をもたらすのか、先行きはいまだ不透明ではあるが、2009年11月13日、厚生労働省が貧困率を初公表した点は特筆すべきであろう。日本のそれが15.7%(2006年)であってOECD加盟国の中位(10.6%)を上回っており、ひとり親世帯のそれは54.3%にも上ることが明らかにされたのである。データを公表することは、現実を直視し、その是正のための方策を考える出発点を与えることになる。社会的連帯と社会的平等を突き崩しかねない貧困・格差問題を直視し、その扱い手の抱える切実な状態をつかまえようとするとき、ジェンダー視点をしっかり据えつつも、階級・階層問題という視点と交差させてもらえていくアプローチが今こそ求められている。



木本 喜美子  
(きもと きみこ)



### CONTENTS

- Move この人に聞く ..... p.1
- Books ジェンダー最・前・線 ..... pp.2-3
- Information ..... p.4

### 未来・ことば

わたしを束ねないで  
あらせいとうの花のように  
白い葱のように  
束ねないでください わたしは稲穂  
秋 大地が胸を焦がす  
見渡すかぎりの金色の稲穂

わたしを名づけないで  
娘という名 妻という名  
重々しい母という名でしつらえた座に  
坐りきりにさせないでください 私は風  
りんごの木と  
泉のありかを知っている風

### 新川和江

詩人  
(『わたしを束ねないで』童話屋, 1997年)